# 近津尾だより

第十五号　　2021年10月

近津尾神社総代会

実りの季節を迎え、皆様にはご健勝のことと存じます。日頃のご奉献とご協力に御礼を申し上げます。

## 祭事等のご報告

コロナ感染へ対応として自粛しながら自治会長様・農業委員長と役員にて、総会議決された事業計画に沿い祭事・活動を進めております。

5月5日には例大祭を自治会長様はじめとした関係者に参列頂き執り行いました。多くの氏子様から御寄附を賜り厚く御礼申し上げます。貴重な浄財は神社運営に活用させていただきます。残念ながら稚児行列・お神輿巡行は中止としました。

6月6日御田祭・御湯祭を催行し、五穀豊穣と無病息災・家内安全を祈りました。お湯祭では大釜二つに湯を沸かし、湯立巫女（ゆたてのみこ）がお神酒を注ぎ入れ、笹を浸し御湯を振り撒き清めます。その後、拝殿にて神楽の舞を奉納頂き農事（仕事）の安全、成功をお祈りしました。

8月15日19時より本殿前にて千灯祭、続いて洞神社前で百灯祭を執り行い、並ぶろうそくの灯と共に氏子の皆様の無災害と繁栄をお祈りしました。

## 今後の祭事予定（＊印は自治会回覧にて募集します）

10月17日草木祭　11月14日＊七五三祈祷祭　12月4日新嘗祭・御火焚祭（日程変更）　12月26日（年末清掃）12月31日除夜祭

1月1日元旦祭　1月2日山の神祭・交通安全祭　1月9日勧請祭

2月6日節分祭・＊厄除祈祷祭・還暦祈祷祭　3月20日＊勧学祭・戦没者慰霊祭

## 市歴史的風致維持向上計画

大津市が策定された上記計画の「維持向上すべき歴史的風致」として“近津尾神社と例大祭、幻住庵祭”が取り上げられ、詳細が市発行の冊子に掲載されました。当該部分の複写を各自治会に回覧配布お願いしました。永く護られ続けてきた歴史的活動が認められ、また今後の維持が期待されています。

＜裏に続く＞

国分の今と昔（その④）

近津尾神社が鎮座する国分地域の今と昔をシリーズでみていきます。今回は、神社境内にある石造物を見ます。

前頁左上の写真は洞神社前の石灯篭です。石灯篭は神前を照らし案内の役目を持つ。その起源は六世紀頃、仏教の影響の一つでもある。一灯であったものが左右一対へと変化してきた。写真の様にろうそくや油（皿）で火を灯すため火袋（火口）の下は黒く煤けている。全高 165cm の「六角型石灯篭」で灯篭の円柱柱部分（竿部という）には摩耗し判読困難であるが、筆者の調査では「延寶三□（乙）卯年」「江州志賀郡・」「奉寄進」「万燈籠」「八月吉？□」「国分村□□」と刻まれており、延宝三年（1675）に国分村民によって寄進されたことが分かる。江戸初期の物であり神社境内で最も古い灯篭である。火口の小さな階段状の彫りが特徴である。明治に洞神社が境内に移座されるまでは現在地の南方 300mの旧洞神社に在ったと思われる。約 350 年経った先日の百灯祭でも火が灯され、今も現役である。

灯篭は参道にも多くあるが、境内では次に古いものが延宝六年（1678）の物で、やはり竿部には「霊燈〇」「照萬年」「国分村」「愚極寄付」と刻印されている。東福寺の愚極礼才とは時代が異なり、寄進は同姓の僧か？全高 190cm を誇る立派な灯篭である。（右写真）

本殿内庭の対は天保五年（1834）奥村氏寄進、本殿前狛犬横の対は文政十一年（1828）真田氏取次（寄進）のものである。なお、この灯篭の火口は後補である。ちなみに県内で現存する最古の石灯籠は瀬田の建部大社の文永 7 年（1231）のものである。

灯篭ひとつを見ても国分地域の人々が永く神社に祈り、大切にしてきたことが分かってきます。

中山敏夫記

**コロナ禍の終息がなかなか見通せませんが、必要な対策を実施しながら祭事を通じて地域の皆様の安全・安心をお祈りしております。皆様にも油断なく対策をお願い致します。**

**なお、当社の祭事には、どなた様でも参加頂けます。**

**近津尾神社社誌頒布**　誠に恐縮ですが、御芳志 500 円/冊をお願いしております。
問合せ先；中山敏夫　090-1717-69550

近津尾神社　総代会　広報・社史編纂
発行文責　　中山敏夫・溝口光行